

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月15日現在

機関番号：32612
 研究種目：新学術領域研究
 研究期間：2008～2012
 課題番号：20121005
 研究課題名（和文） サンゴ礁—人間共生系の景観史

研究課題名（英文）

研究代表者

山口 徹 (YAMAGUCHI TORU)
 慶應義塾大学・文学部・教授
 研究者番号：90306887

研究成果の概要（和文）：みる景観を自然の営力と人間の営為の絡み合いの歴史的産物と位置づけ、オセアニア環礁（低い島）と八重山諸島石垣島（高い島）のホーリスティックな景観史を、ジオ考古学、形質人類学、歴史人類学、文化人類学の諸学の協働によって明らかにし、その中で人とサンゴ（礁）のかかわり合いを遠い過去から現在まで見とおした。立場や系譜が必ずしも同じではない人々のあいだに、サンゴ（礁）とのこれからの「共存」のあり方への共通関心を喚起する目的で、研究成果を活用したアウトリーチに積極的に取り組んだ。

研究成果の概要（英文）：Viewing a present landscape as a historical artifact of the long-term interactions between two kinds of agents, natural and human, we illustrated holistic landscape histories both of Oceanic atolls (so-called low islands) and Ishigaki-jima (a high island) in Yaeyama Islands in cooperation of geo-archaeology, physical anthropology, historical anthropology and cultural anthropology, in which various concerns of inhabitants with coral reef were discussed and elucidated in a diachronic perspective from the distant past to the present. We were also aggressive to deliver outreach activities making the most of our academic outcomes as to challenge the shared interest among a variety of the present inhabitants in their coming coexistence with coral reef.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	17,500,000	5,250,000	22,750,000
2009年度	15,500,000	4,650,000	20,150,000
2010年度	16,000,000	4,800,000	20,800,000
2011年度	15,900,000	4,770,000	20,670,000
2012年度	16,700,000	5,010,000	21,710,000
総計	81,600,000	24,480,000	106,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：景観史・ジオアーケオロジー・歴史生態学・歴史人類学・アウトリーチ

1. 研究開始当初の背景
 計画研究題目を構成する「景観史」とは、景観プランニング(landscape planning)の分野でも使用されはじめている概念で(Marcucci 2000)、人間の営為と自然の営力の相互作用

から形成される歴史的産物として景観が位置づけられる。本研究では特に、次の4点から歴史的視点を重視した。(1)動的に変化してきた景観を理解することによって、特定景観や生態系の固定的な価値づけを避け、将来

の変化の方向性を踏まえたプランニングが可能となる。(2)自然と人間の動態的な相互作用の理解は、過度の景観保全や開発至上主義の二分を超克し、自然と人間の関係性維持に重点を置くことにつながる。(3)通史的視点をもつことによって、プランニングの実践そのものが景観の変化を引き起こしていく歴史的过程になることを理解できる。(4)身近な地域史を取り上げることによって、そこに暮らしてきた人々の活動の痕跡を景観のなかに見出し、将来の景観プランニングにそうした人々が主体的に関与するよう促すことができる。

Marcucci 2000. Landscape history as a planning tool. *Landscape and Urban Planning* 49:67-81.

2. 研究の目的

本計画研究(B02)では、サンゴ礁学全体のなかでは特に人間社会に焦点をあて、「サンゴ礁をもつ島嶼環境における人間居住の解明」を共通テーマとし、歴史とフィールドワークを共通項とする人文社会科学系諸分野から研究班を構成した。ツバルやマーシャル諸島の環礁(低い島)とともに、八重山諸島の石垣島(高い島)を共通フィールドとし、サンゴやサンゴ礁にかかわる(1)人間活動(特にストレス)と(2)人間社会にとっての資源価値(生態系サービス)に焦点をあて、それぞれ長期的スケールと短期的スケールでアプローチすることを目指した。(1)については、長期的環境史の復元を目指すジオアーケオロジーと、文献資料や聴取調査による近現代農業史の視点から、サンゴやサンゴ礁への人的影響の動態的变化を解析した。(2)については、動物考古学と形質人類学による長期的資源利用史や、歴史人類学と文化人類学による近現代期の資源利用を明らかにすることによって、サンゴやサンゴ礁の資源価値を相対的に評価することを目的とした。

3. 研究の方法

歴史学とフィールドワークを共通項とする本計画研究(B02)は、人間居住史と自然史の両面を扱ってきたジオアーケオロジーを中心に、動物考古学、形質人類学、歴史人類学、文化人類学からなる。過去の調査情報にもとづき、オセアニア環礁(低い島)の景観史をテーマとする研究会で議論を重ねるとともに、新たなフィールドとして八重山諸島石垣島(高い島)を設定し、以下の調査を実施した。

(1) ジオアーケオロジー・動物考古学・形質人類学は、長期的環境史のための広域ボーリ

ング調査と試料の年代測定・花粉分析を進め、サンゴ礁学の B01 班・C01 班と連携を取りながら人間居住史や土地利用史の解明を目的とした発掘調査を実施した。

(2)歴史人類学・文化人類学は、出自や立場を異にする多様な主体の存在を析出するために、明治期以降の人口動態や人口配置の変遷にかかわる文献資料・統計資料の収集を行った。また、近代以降に急速に進んだ河川改修や農地改良、農業用給排水設備の整備について情報を収集し、赤土流出の歴史的背景を把握した。

(3)これら個々の成果を景観史の枠組みに組み込むことによって、「絡み合う人と自然の地域史」の構築を目指した。さらに、ホーリスティックで通史的な地域史の活用可能性を考えるために、石垣島におけるエコツーリズムの歴史的展開と現状把握を目的とした聴取調査を補足的なトピックとして設定した。

4. 研究成果

本計画研究(B02)の成果は大きく、オセアニア環礁と八重山諸島石垣島の2つのフィールドに分かれる。

(1)オセアニアの環礁(低い島)にかかわるので、本プロジェクト以前から進めてきたフィールドワークの情報分析と研究会における討論を通して、以下の諸点が明らかとなった。

①環礁州島の形成史(山口): 完新世中期の海面変動に伴って上方成長をとげたサンゴ礁の基盤のうえに、有孔虫やサンゴの砂礫が堆積することによって、B.P. 2000 年前から陸地の形成が始まった。

②初期居住(山口): 先史人間居住が B.P.2000 年以降すぐ始まった環礁州島(ex. マーシャル諸島マジロ環礁ローラ)があるのに対し、B.P.500 年程度しか遡らない環礁州島もある。地球温暖化問題で「沈みゆく島」として報道されるツバルのフナフチ環礁フォンガフレ州島はその1つである。

③淡水資源(山口): 環礁州島の居住は、地下に形成される不被圧淡水レンズに制約される。その規模と水質は、降雨量、州島規模、そして地下堆積物の透水性によって変動する。淡水レンズに恵まれた州島では、サトイモ科根茎類の栽培が可能であり、人間居住史が B.P.2000 年近くまで遡る。

④海産資源利用(山口): 環礁州島の人間居住は、サンゴ礁環境がもたらす豊富な海産資源の活用によって支えられる。遺跡からは、ウミガメ、マイルカ科カズハゴンドウ、外洋

回遊性のサバ科・アジ科、ラグーンで捕獲されるベラ科・ブダイ科、底棲性のハタ科・フエダイ属・フエフキダイ属まで幅広く出土した。

⑤植民地期の景観形成（棚橋）：完新世サンゴ礁の発達と砂礫の堆積が作り上げた州島に、サトイモ科根茎類やパンノキ、ニワトリやイヌなどの動植物を含め人間が外から運び込んだ要素が加えられてきた。その営為は植民地期にも頻繁に生じた。特に、実質的な宗主国がドイツ、日本、アメリカと変化したミクロネシアでは多様な痕跡を認めることができる。特に、砂礫を主とする未成熟土壌でも栽培可能なココヤシのプランテーションがコブラ生産のために環礁にも導入され、州島植生が単相林化した影響は大きい。過去の文化人類学的関心から作成された暫定的な土地区画図が法的拘束力を帯び、インフラ整備を含め村落の在り様を規定していることも確認できた。現在の環礁州島景観はまさに、自然の営力と人間の営為が生み出した歴史的産物として理解されるべき対象である。

⑥島嶼間ネットワーク（深山）：環礁州島の景観は、サンゴ礁起源の陸域という制約を受け、サンゴ礁の存在を前提とする歴史的産物であった。それゆえに、島民たちは自らの生活世界を1つの環礁に限ることなく、利用可能な生態系を他島まで拡大していた。外から持ち込まれた要素の中には玄武岩製石斧があり、火山起源の高い島との交流が先史期からあったことを示している。現在の環礁島民のライフヒストリーを調査したところ、個人が頻繁に移動を繰り返していることが明らかとなった。低平で厳しい陸上生態系のなかでの生存にとって、他島との社会的ネットワークが生存を高めるためのある種のセーフティーガードになっていると考えられる。地球温暖化・海面上昇問題への対応策は、1つの環礁の範囲をこえる島嶼間の社会的ネットワークを有効に活用するものでなければならない。

(2)熱帯・亜熱帯の高い島には、裾礁や堡礁型のサンゴ礁が発達している。しかし、環礁と比較すると陸域は起伏に富み、動植物相の種数は多く、陸上生態系は格段に複雑である。それゆえに、島嶼景観全体のなかでサンゴ礁を相対的に扱う必要がある。そのことを念頭に、先史から現在への通史的視点で陸域と浅海域の関係を軸に八重山諸島石垣島の景観史調査を実施した。

①浅海域の環境変遷（山口）：石垣島南西部の名蔵にはマングローブ湿地が広がり、その海側には800メートルほど沖合まで干潟や沈水藻場が続く。湿地や干潟には、干潮時に離水するマイクロアトールが数多く分布する。

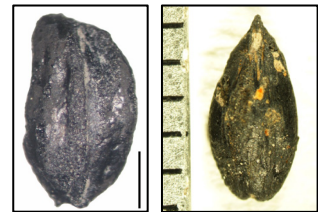
高精度GPSによる測量によって、離水マイクロアトールの高度が、マングローブ湿地奥から干潟・沈水藻場に向かって次第に低くなることを確認した。



さらに、各地点のサンプル試料を年代測定したところ、湿地奥の潟湖で B.P.5000 年、湿地出口で B.P.3500 年、干潟から沈水藻場で B.P.2100 年という結果を得た。沖合に向かって高度が減じるほど離水時期が新しいことになる。完新世中期以降の相対的な海面変動によって、ハマサンゴやキクメイシが生息する浅海域の環境が湿地や干潟へ変化したことが明らかとなった。また、現在の名蔵湾には、水深 2m 前後に枯死したハマサンゴの群体が点在する。サンプル試料の年代測定は B.P.1200-800 年を示しており、完新世の海面変動とは異なる枯死の要因を考えなければならない。

②洪水堆積物（山口）：名蔵地区の沖積低地（休耕田）で実施したジオアーケオロジー発掘調査によって、B.P.1000 年前後の地層から洪水堆積物で埋没したサガリバナとサキシマスオウの樹林を確認できた。水深 2m 前後のサンゴ群体の枯死に陸域からの土砂流出が影響した可能性が浮かび上がった。

③沖積地の水田開発：洪水堆積物の直上には黒褐色粘土層が堆積し、その層中から炭化米と炭化麦を複数検出



できた。年代測定結果は、B.P.385 年（炭化米）、B.P.340 年（炭化米）、B.P.320 年（炭化大麦）を示した。較正年代で AD1400-1600 年には台地上の畑作と谷戸での水田耕作が行われていたことになる。内陸からの土壌流出はハマサンゴが生育する浅海環境の悪化を引き起こした一方で、水田適地となる沖積低地の形成につながったと考えられる。

④ボディースケープ（吉田）：人間の身体に刻まれる環境影響をここではボディースケープと呼ぶ。オセアニア



環礁と八重山諸島から出土した男性古人骨頭蓋のプレグマを計測したところ、サンゴ礁環境を伴わない地域の古人骨と比較して有意に厚いことを確認した。骨形成の必須成分

の1つである可溶性ケイ素がサンゴカルシウム中に含有されていることに着目し、マウスへの投与試験を行った。その結果、標準飼料投与群とサンゴカルシウム投与群の間で、頭頂間骨・上腕骨・大腿骨の厚さに有意な差を認めることができた。更新世石灰岩や完新世サンゴ礁をもつ島嶼環境が人間の身体(骨形成)にもたらす恵みと評価できる。

⑤ 漆喰製造業 (深山)：本土復帰後の1970年代までは、追い込み漁・潜水漁・釣漁の場としてサンゴ礁が利用されてきた



ばかりでなく、サンゴそのものが壁石や漆喰原料として利用されてきた。漆喰の製造・使用の歴史は沖縄本島では遅くとも15世紀には始まっており、それを担った左官は瓦製造職人とともに、那覇や首里における都市型職人として発展したと考えられる。石垣島では、17世紀末に本島から瓦製造職人が招聘されている。19世紀末には、民間住宅での瓦葺が許可され、漆喰の需要が高まった。当初は、沖縄本島の職人が一時的に出張することが一般的だったが、しばらくして左官の一部が石垣島に移住した。戦後は石垣島を中心に八重山諸島で広く左官が活躍した。石垣島に健在する元左官職人への聴取調査から、系譜という観点からは那覇系・首里系・地元系に、開業の経緯としては世代継承型・新規参入型に分かれ、それぞれ異なる属性の左官業者が競合していた。しかし、1960年代以降にセメントが移入されはじめたことと、サンゴ漁の法的禁止によって左官業は衰退し、漆喰製造の知識は急速に失われつつある。

⑥ エコツーリズム (下田)：石垣島を拠点とするエコツアーについて聴取調査を行った。多くのツアーで「景観を眺めるための知識と技能」が強調される中で、数は少ないものの地元出身の事業者のなかに、「かかわるための知識と技能」の活用を試みる事例が見出された。漁業を本職とする事業者は、サンゴ礁生態系の固定的な保全よりも、「漁民の体感」や「資源管理」の重要性を強調した。また、生まれ育った土地に「負荷をかけてきた」感覚や、その負荷によって変貌してしまった風景の「記憶」を伝承することに力点を置く事業者もいた。島嶼景観への新たな意識を生み出す仕掛けとしてエコツーリズムを評価するならば、自然の営力と人間の営為の絡み合いの歴史的産物として現景観を位置づける研究や、その調査プロセスそのものが観光資源の幅の拡大に寄与しうるのはである。

⑦ アクティブ・アウトリーチ (山口)：琉球

王府期の通耕者や強制移住者ばかりでなく、明治から昭和にかけても、沖縄本島の糸満系漁民、



宮崎県の鯉節業者、鹿児島県の寄留商人、四国や台湾の製糖業者、終戦後に入植した自由移民や計画移民、物流や交通手段の発達によって増加した観光業者や畜産業者など、多様な立場と系譜をもつ島民が現在の石垣島に居住する。その多様な利害が交差しながら、陸域や・海域の利用や開発が進められてきている。それゆえ、人とサンゴ(礁)の将来的なかかわり合い(共生の在り方)を検討するにも、サンゴやサンゴ礁のみを対象化するわけにはいかない。島嶼景観をホーリスティックに幅広く扱い、その変化の動態のなかに多様な島民の暮らしを位置づけられれば、将来の景観プランニングに向けた対話創出の可能性が見えてくる。アクティブ・アウトリーチと名付けたこの発想にもとづいて、研究成果公開のための講演会を石垣島で毎年開催し(4回)、エコツアー業者を対象とした巡検ツアーも実施した(1回)。さらに、最終年度には、「暮らしの中のサンゴ礁—サンゴと人がひらく南島の人類誌」と題して、サンゴ礁学を構成する考古学・文化人類学・形質人類学・地球科学・地理学・環境学の研究者を招聘し、一般公開シンポジウムを沖縄県立博物館美術館にて開催した。100名近い地元の方々に来場いただき、活発な対話を交わすことができた。その中で特に興味深い点は、サンゴ(礁)や海は保全活動の場として認識されてはいるが、個々人の暮らしや記憶のなかではむしろ遠い存在で、怪我をしやすい危険な場所として親から教えられ、そして子に伝えていく対象だという発言である。研究者は、研究対象の生物多様性や文化財としての価値が普遍的なものであり、そこに住む人々にも共有されうると安易に想定しがちである。しかし、破壊的利用や忌避すべき対象、あるいは無関心といったネガティブな関心も含め、そこに生きる多様な人々とサンゴ(礁)との歴史的絡み合い・せめぎ合い・もつれ合いを踏まえて初めて、これからの共存のあり方が創出できるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計20件)

① 山口徹、絡み合う人と自然の歴史学に向けて—その学際的広がりにもとづく理論的考

察、史学(三田史学会)、査読有、82巻3号、2013、掲載決定

②小林竜太、山口徹、山野博哉、リモートセンシングによる石垣島サンゴ礁形成史の地域差推定—先史資源利用研究に向けて、考古学研究、査読有、vol.60、2013、掲載決定

③下田健太郎、石垣島の「エコツーリズム」を紡ぐ実践と語り、三田社会学、査読有、18号、2013、掲載決定

④深山直子、2011年クライストチャーチ地震への『マオリの対応』—自然災害時におけるエスニック・リソースの有効性に関する試論、コミュニケーション科学、査読有、37巻、2012、123-146

⑤Kayanne, H., T. Yasukochi, T. Yamaguchi, et al., Rapid settlement of Majuro Atoll, central Pacific, following its emergence at 2000 years CalBP, *Geophysical Research Letter*, 査読有, vol.38, 2011, DOI:10.1029/2011GL04163

⑥深山直子、石森大知、「沈む」島の現在—ツバル・フナフチ環礁における居住を巡る一考察、史学(三田史学会)、査読有、79巻3号、2010、57-75

⑦棚橋訓、島の脆さ、島の強さ—オセアニアの環礁社会に思う、オセアニア、査読無、81巻、2010、1-3

⑧Yamaguchi, T., H. Kayanne, H. Yamano, Archaeological investigation of the landscape history of an Oceanic atoll: Majuro, Marshall Islands, *Pacific Science*, 査読有, vol. 63, no.4, 2009, 537-565

⑨Yamaguchi, T., Book review of 'Vanished Islands and Hidden Continents of the Pacific' by P.D. Nunn, *People and Culture in Oceania*, 査読有, vol.25, 2009, 101-105

⑩山口徹、甲斐祐介、ピット耕地の景観史—マーシャル諸島マジユロ環礁のジオアーケオロジー調査から、社会人類学年報、査読有、33巻、129-150

〔学会発表〕(計20件)

①吉田俊爾、サンゴカルシウムを投与したマウスの下顎骨について、第118回日本解剖学会総会・全国学術集会、2013/03/29、サンポートホール高松・かがわ国際会議場

②山口徹、ツバル・フナフチ環礁のジオアーケオロジー調査、日本オセアニア学会第30回研究大会、2013/03/24、日光総合会館

③深山直子、サンゴの伝統的利用—沖繩・石垣島における左官の事例を中心に、日本オセアニア学会第30回研究大会、2013/03/24、日光総合会館

④Yamaguchi, T. Geomorphology of a 'drowning' island: geomorphic formation and prehistoric human habitation of Funafuti Atoll, Tuvalu, *American*

Geophysical Union, Fall Meeting, 2012/12/04, San Francisco.

⑤Yoshida, S., The rocker jaw from Pukapuka Atoll, Polynesia., *Sino-Japan Dental Conference*, 2012/04/27, 四川大学

⑥山口徹、小林竜太、つながる海と陸の環境史—八重山諸島石垣島のジオアーケオロジー調査報告、日本オセアニア学会第29回研究大会、2012/03/24、倉敷芸文館

⑦山口徹、棚橋訓、吉田俊爾、深山直子、オセアニア環礁州島の景観史—文理融合型研究の成果、日本文人類学会第45回研究大会分科会主催、2011/06/12、法政大学

⑧Yamaguchi, T., Landscape history of a 'drowning island': prehistoric human settlement and geomorphologic formation of Funafuti Atoll, Tuvalu, *The Second Asia Pacific Coral Reef Symposium*, 2010/06/23, Phuket, Thailand.

⑨Kayanne, H., K. Nadaoka, M. Hidaka, M. Suzuki, Y. Yamaguchi, Y. Yamano, Workshop on 'Strategy for Ecosystem Symbiosis and Coexistence with Human-being under Multiple Stresses, *The Second Asia Pacific Coral Reef Symposium* (分科会共同主催), 2010/06/23, Phuket, Thailand.

⑩棚橋訓、山口徹、ツバルとサンゴ礁—人間共生系研究の最前線: 分析と解釈をめぐる対話、日本オセアニア学会関東地区研究例会(シンポジウム共同主催)、2009/07/25

〔図書〕(計12件)

①山口徹、夢ふくらむ南海の神秘そして楽園—歴史人類学の視点から、シリーズ文学部は考える「夢を考える」、慶應義塾大学出版会、2012、pp.25-41

②棚橋訓、地図と権力—マーシャル諸島ローラ島の地図作製をめぐる権力作用の一考察、知の太陽へ、大洋の地へ—アジア経済研究所オセアニア研究シリーズ(塩田光喜編)、彩流社、2010、pp.167-202(査読有)

③棚橋訓、植民地主義との邂逅、朝倉世界地理講座—台地と人間の物語—第15巻オセアニア(片山一道・熊谷圭知編)、朝倉書店、2010、pp.132-146

④山口徹、「高い島」と「低い島」—歴史生態学の視点から、オセアニア学(日本オセアニア学会編)、京都大学学術出版会、2009、pp.117-131(査読有)

⑤棚橋訓、聖恩の景観史—マーシャル諸島にみる軍政期南洋群島統治の一断面、オセアニア学(日本オセアニア学会編)、京都大学学術出版会、2009、pp.334-344(査読有)

⑥吉田俊爾、クック諸島出土ポリネシア人の人類学的研究、サンゴ礁の景観史(近森正編)、慶應義塾大学出版会、2008、pp.387-404

⑦山口徹、クロチョウガイをめぐる環礁の文化史—北部クック諸島プカプカ環礁の考古学調査、サンゴ礁の景観史(近森正編)、慶應義塾大学出版会、2008、pp.149-173

[その他]

①一般公開シンポジウム：山口徹・茅根創・灘岡和夫・棚橋訓・吉田俊爾・深山直子・下田健太郎(共同開催)、暮らしの中のサンゴ礁—サンゴと人がひらく南島の人類誌、2013/03/30、沖縄県立博物館美術館講堂(沖縄タイムズ記事「シンポ：暮らしの中のサンゴ礁」3/25)

②日本学術振興会ひらめき☆ときめきサイエンス：山口徹(代表)、外に出て『絡み合う人と自然の歴史学』を体感しよう！景観史のフィールドワーク入門、2012/09/29、慶應義塾大学三田キャンパス



③夏休み子供学習会：山口徹・港区郷土資料館(共同開催)、サンゴ礁の海と人々の暮らし、2012/08/22、慶應義塾大学三田キャンパス(資料館だより70号)



④発掘調査現場説明会：山口徹(代表)、2012/08/11、石垣島名蔵浦田原発掘地点、(八重山毎日新聞記事「名蔵で炭化米を発掘：1000年前の地層から」8/12)



⑤公開講演会：山口徹(代表)・朽木量・深山直子・王在喆、絡み合う人と自然の歴史学のために(第3回・4回)、2011/08/19・20、石垣市名蔵公民館・石垣市立図書館

⑥公開講演会：山口徹(代表)・吉田俊爾、絡み合う人と自然の歴史学のために(第2回)、2010/08/19・20、石垣市名蔵公民館・石垣市立図書館(八重山毎日新聞記事「アンパルの成り立ちを解説：サンゴ礁学で講演会」8/21、八重山日報記事「アンパルの成り立ち：山口教授が成果発表」8/21)

⑦巡検ツアー：石垣島エコツアー事業者を対象とした名蔵調査の巡検、2010/03/26、

⑧公開講演会：山口徹(代表)・下田健太郎・小林竜太・他1名、サンゴ礁学—絡み合う人と自然の歴史学のために(第1回)、2010/03/25、石垣市立図書館(八重山日報記事「サンゴ礁学の成果を公開」3/27)

⑨ホームページ：慶應義塾大学文学部研究最前線レポート <http://www.flet.keio.ac.jp/res/report-yamaguchi.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 徹 (YAMAGUCHI TORU)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：90306887

(2) 研究分担者

棚橋 訓 (TANAHASHI SATOSHI)
お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科(研究院)・教授
研究者番号：50217098

吉田 俊爾 (YOSHIDA SHUNJI)
日本歯科大学・歯学部・准教授
研究者番号：70081627

朽木 量 (KUTSUKI RYO)
千葉商科大学・政策情報学部・准教授
研究者番号：10383374

深山 直子 (FUKAYAMA NAOKO)
東京経済大学・コミュニケーション学部・講師
研究者番号：90588451
(H23-24)

(3) 連携研究者

佐藤孝雄 (SATO TAKAO)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：20269640

王在喆 (OH ARIYOSHI)
立正大学・経済学部・教授
研究者番号：60296762

(4) 研究協力者

下田健太郎 (SHIMODA KENTARO)
日本学術振興会特別研究員 DC2
慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程

小林竜太 (KOBAYASHI RYUTA)
慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程